

魯迅(ルーシュン、ろじん、1881～1936)は日本留学時代(1902-1909)にヨーロッパロマン派の影響を受けて文学活動を開始し、1918年「狂人日記」執筆以後の約10年は国民性批判のリアリズム文学から内面探求の象徴主義的作品までを発表、そして1920年代後半以後晩年の約10年はプロレタリア文学に深い関心を寄せて、批評・翻訳活動を行った。本論文はその魯迅晩年における1920～30年代の日本プロレタリア文芸思潮との影響関係を論じたものである。

博論第一章「序説」は日本プロレタリア文芸思潮史を概観し、第二章「魯迅と厨川白村」は、厨川の日本社会への批判および労働文学論に共感を抱いた魯迅が、同時代の日本文壇、特にプロレタリア文学運動へと関心を寄せるに至った点を指摘している。第三章「魯迅と片上伸」は「プロレタリア文学の内容と様式」をめぐる片上の論文に関心を寄せた魯迅が片上論文の翻訳に着手し、中国におけるプロレタリア文学論争をリードするに至った点を、第四章「魯迅と青野季吉」は、魯迅が青野の「目的意識」論を拒絶するいっぽうで、彼が早稲田大学露文科の恩師片上から継承したプロレタリア文学様式問題に関心を寄せて1927年前後に青野論文を三篇翻訳した点を考察している。

第五章「魯迅と蔵原惟人」は主に魯迅が蔵原訳のファージェーエフ『壊滅』を中国語に重訳するなど蔵原の翻訳に注目するいっぽうで、蔵原のプロレタリア・リアリズム創作理論には批判的であった点を、第六章「魯迅と上田進」は魯迅が上田の系統的なソヴェート文芸理論翻訳を高く評価していたものの、ゴゴリ『死せる魂』翻訳をめぐる日本語への土着化を重視する上田訳を批判し、自身はあくまで硬訳(直訳調文体)を通じた中国語変革という観点から、ゴゴリ同作の翻訳を実践した点を指摘して、その過程から魯迅のプロレタリア文学創作への諦観がうかがえる、と分析した。

本論文の主な成果は次の通りである。

(1) 労働文学を論じる厨川に共感して日本プロレタリア文学受容の前史段階へと進み、片上からの影響によりプロレタリア文学を新興文学と認め、青野への関心によりプロレタリア文学と政治との関係を改めて考察し、続いて蔵原の翻訳に導かれてマルクス主義文学理論研究を深め、上田訳の検討を通じてイデオロギー的傾向文学と自らとの距離を実感する——このような日本プロレタリア文学運動と魯迅との複雑な影響関係を、より具体的に鮮明に描き出し、日中両国の魯迅研究において新境地を開いた。

(2) 魯迅と厨川以下の日本文学五五人との影響関係を、綿密な文献調査および片上伸・上田進関係の新資料発掘により、詳細に分析した。

そのいっぽうで、本論文には論証が不十分なままに推測を行っている部分も散見され、著者の魯迅のプロレタリア文学観自体の分析も十分とは言えない。

しかし上記二つの成果を中心に顕著な成果をあげており、本審査委員会はその内容が博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。